

# 「亡国の風」と ジャーナリズム

平間 洋一

(元防衛大学校教授)

## 1 60年前の「亡国の風」

マニフェストを掲げ「チェンジ、チェンジ」のポピュリズムの風に乗れ、民主党が圧倒的な勝利を獲得した。この風は何をもたらすのであろうか。1940年1月21日、米内閣成立5日後に房総半島南端の野島崎南東の海上で北米定期航路の客船浅間丸が、英巡洋艦リパブルの臨検を受けドイツ人乗客21名が拉致された。この行為は公海上で行われており国際法的には正当な権利であった。しかし、

意向全く無視 領土間近の不愉快事、「英、不当見解固執か」と新聞は報じ、新聞に煽られた反英世論に乗じて同志会、東学会、東亜建設国民連盟、それに社会大衆党までもが抗議書や決議文を政府に突き付け、三国同盟に反対し親米英派で対米戦争回避を期待されていた米内閣の支持率を急落させた。

さらに4月9日にはドイツ軍の快進撃が始まり、6月10日にイタリアが枢軸国側に立って参戦し、22日に独仏休戦協定がコンピエーニュの森で調印され、ドイツ軍の本土爆撃を受ける戦局となると、英国はアジアの權益を日本と妥協して確保しようとして、7月には天津租界問題の協議を開始し、8月には天津租界からの撤兵に同意し、さらにピルマの蒋援ルートに閉鎖も申し出た。

しかし、新聞は「有田外交転換期に立つ、英米仏依存外交は失敗」、「大転換必至の帝国外交」と有田外交を激しく批判し、さらに中支方面軍参謀副長武藤章少将の強硬意見を連日報じて

長が会談を打ち切り中国に去ると、「租界の実態悪化せんも責は英国側にあり、北支軍、決然たる態度開陳」、「英国に鉄槌を」などと一面に報じて、英国を米内閣陣営に追いやってしまった。一方、国内では新聞の「あり」を利用し、政権を取りたい親独反英米派の政治家や革新官僚が、天皇が「日独同盟論を抑える意味で」期待していた米内閣を、7月22日には成立僅か半年後には倒し、近衛文麿が総理となると強硬論で人気

のあった松岡洋右を外相とした。米内閣は総辞職後に兵学校同期の荒城次郎に「魔性の歴史は人に狂態の踊りを踊らせ、人にとその踊りこそ目的を達成することのできる見事にして荘重なもの」と思いこませる。しかし、

荒れ狂う海が平穏におさまる時のように、狂乱の場面から静かに醒めてくると、どんな者共でも、ハテ、こんな積もりではなかったと驚異の目をみはるようになってくるだろう」との手紙を出したが、「狂態の踊り」を踊ったのは反米英、親独伊ソの

スコミであり、外交官では松岡洋右ではなかったか。

最近の日本もマスコミに踊らされ、江戸末期の「ええじやないか」の「おかげ踊り」の「狂態の踊り」を踊っているのではないか。現在の新聞やテレビで置き換えてみると、ドイツに対する悪評などは一切報道しなかった当時の偏向したマスメディアに極めて類似しているからである。さらに、米内閣倒壊から70年後には「反安倍・反麻生キヤンペーン」を展開し、安倍次いで麻生内閣を退陣に追い込んでしまった点までもである。「何時か来た道」を歩んでいるような、誰もが止められなかった当時の「時流」に類似しているように私には見えてならない。

## 2 100年前の「亡国の風」

### 「亡国の風」

「亡国の風」は100年前にも吹いた。ポーツマス講和条約で領土の割愛も賠償金もないことが判明すると、新聞は「嗚呼、嗚呼、嗚呼、大屈辱、大屈辱」

「この屈辱！」「あえて閣員元老の責任を問う」などと、元老や閣僚、小村寿太郎全権を攻撃した。特に『朝日新聞』は帝国の威信を傷つける「屈辱の和約」である。小村全権は「努力を怠り違算を致して、この屈辱を甘んぜんとす」。この講和条約は陛下の「聖意に非ざる」ものであり、「和議の破棄を命じ給はんことを請い奉る」と社説に書いた。そして、このような新聞の煽りを受け「ポーツマス講和反対」の日比谷焼き討ち事件を起こし、元老や桂太郎首相が米国の鉄道王ハリマンと仮調印した日米が共同で南満州鉄道を運営することを協定した「予備覚書」を破棄してしまった。もし、南満州鉄道などを日米が共同で運行していたならば、米国もコミンテルンの中国での陰謀工作の実情を多少は理解し、日本を日米戦争へと追い詰めることはなかったのではないか。

米内光政は狂態の踊りから覚め「ハテ、こんな積もりではなかったと驚異の目をみはるようになったてくるだろう」と書いた

が、驚異の目を見張る目覚めは余りにも早く、慚愧に堪えないものであった。選挙から2週間も過ぎないのに日米安保体制の解体だけでなく、東アジア共同体（中華大東亜共栄圏）の推進、外国人参政権付与法案、人権擁護法案、国立追悼施設の建設、教員免許制度やゆとり教育の見直しなど、早くも選挙中は民主党左派がマニフェストの裏に巧妙に隠していた「民主党政策集 INDEX 2009」を推進し、国民が選挙で狂態の踊りを踊らさせられたことに気付かされたのである。かつて吉田茂総理が「総理は世論を無視しているが、日本の新聞を読んでいるのか」と非難されると、「日本の新聞はレベルが低いから外国の新聞を読んでい」と答えて物議を醸したことがあったが、現在の新聞やテレビは江戸時代の瓦版新聞と変わっていない。この未発達なレベルの低いジャーナリズムが「亡国の風」を吹かせ、国を過ち再び亡国の道を歩ませるのであるか。